

地域連携プロジェクト研究
〔研究論文〕

旧城下町・登米の歴史的建造物における 文化財的価値を醸しだすディスプレイ制作

中村 琢巳¹⁾, 竹内 泰¹⁾, 大沼 正寛²⁾

Display Design of the Historic Building which Creates the Cultural Heritage Value in Castle Town Toyoma

Takumi NAKAMURA ¹⁾, Yasushi TAKEUCHI ¹⁾, Masahiro ONUMA ²⁾

Abstract

This project is concerned with the design of display of a historic building in castle town Toyoma. The feature of the project is the following. At first, students also participated in actual building as well as a design suggestion. In particular, students painted by traditional technique under craftsman's guidance. Second, the restored space can be used flexibly. We designed the furniture which can be used for both of exhibition and a workshop.

1 プロジェクトの背景

宮城県登米市登米町は「みやぎの明治村」として知られ、重要文化財・旧登米高等尋常小学校をはじめとし、武家屋敷や町家、近代洋風建築など多彩な歴史的建造物が数多く残る町である。本プロジェクトグループは継続して、登米町の歴史的建造物の調査と保存活用事業に取り組んでいる。2017年度の本学地域連携研究「城下町登米の歴史的建造物の調査と価値発信」では自治体との連携にもとづき、歴史的建造物の実測図制作や価値評価の研究および文化財への登録を推進した。

本プロジェクトは、これにより2018年に文化庁登録有形文化財になった味噌醤油醸造商家「海老喜」の保存活用に関する実践プロジェクトである。海老喜の登録有形文化財のなかでも、とりわけ町のランドマークとなる景観的価値の高い旧店舗のディスプレイを、所有者からの要請によって、学生によるデザイン提案で実施することとなった。

旧店舗は、蔵造り商店街の角地に立地する景観的な要所である一方、現状は物置のような雑然とした雰囲気が否めない。そこで所有者からは、この角地の空間を登録有形文化財

1) 東北工業大学工学部建築学科

Department of Architecture, Tohoku Institute of Technology

2) 東北工業大学ライフデザイン学部安全安心生活デザイン学科

Department of Life Design for Safety and Amenity, Tohoku Institute of Technology

にふさわしく再生してほしい、またこの事業が単なる景観やディスプレイの整備にとどまらず、文化財を核とした地域活性化へも寄与してほしい、という要望を受けた。そこで、建築学科の中村琢巳研究室（建築史）、建築学科の竹内泰研究室（建築設計）、安全安心生活デザイン学科の大沼正寛研究室（地域計画）が連携し、研究室所属学生たちによるデザイン提案を基軸にプロジェクトを進行させることにした。



写真1 本プロジェクト実施前の海老喜旧店舗

2 登録有形文化財・海老喜とその旧店舗

2.1 デザイン対象の商家について

海老喜は登米伊達家の城下町・登米町に所在する味噌醤油の商家である。町への玄関といえる登米大橋（北上川）を渡った角地に立地する。当地には武家屋敷や商家など数多くの歴史的建造物が連なる歴史的町並みを伝える。そのなかでもこの海老喜は角地の立地ゆえ、ランドマーク的な店構えを呈する。創業は天保4年であり、現在の代表で8代目となる。敷地内には、角地に構える旧店舗をはじめ、表蔵、旧醤油仕込み蔵（海老喜ホール）、文庫蔵、旧酒蔵（蔵の資料館）、味噌醤油仕込み蔵という5棟の土蔵に加えて、作業場や住宅が伝わる。歴史的建造物が群として残り、伝統的な味噌醤油醸造の屋敷構えを色濃くとどめる。これら8棟の建物群が2018年に文化庁登録有形文化財に登録された。

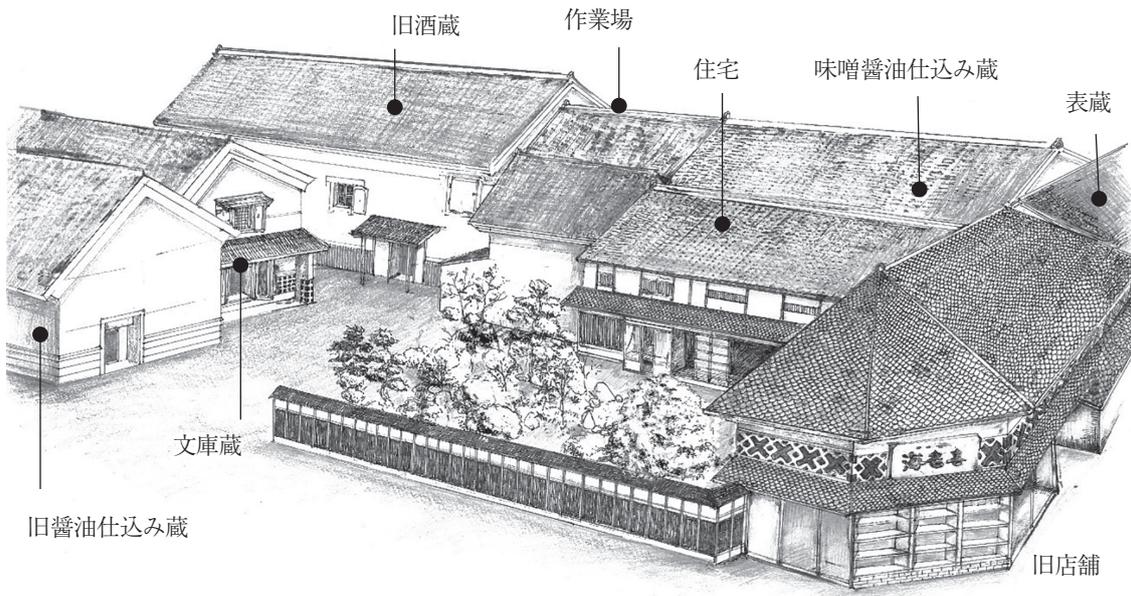


図1 海老喜の登録有形文化財の建築群
(現店舗を省略し、文化財のみを作図した。作図：立花莉乃)

2.2 旧店舗の建築について

昭和54年に現在の店舗が新築されるまで帳場をもつ店舗として利用されていた建物である。蔵造り店舗が点在する三日町通りの角地、景観的に重要な位置に構える。

切妻造りスレート葺き、二階建てである。一階は真壁とする一方、二階部分は漆喰を塗り込めた大壁として、壁面には海鼠壁を設ける。2階腰巻には四半貼り目地を変形させた海鼠壁がまわり、外観意匠を凝らす。また1階・2階ともセガイ造りとする。南北道路が江戸時代以来の街路（三日町）であり、東側の通りから入る平入の構成である。この北東側に表蔵が接続され、また北西側奥に住宅が接続する。桁行7間、梁間4間の規模で、中央に住宅へいたる通路をあける。現状のこの規模と隅切の平面は、昭和戦前の登米大橋工事・道路拡幅で切縮められたものである。

間取りは通路を挟んで、南西側に店の間、北東側に帳簿を構えていた。帳簿の机などの家具は、現在も蔵の資料館で保存・展示されている。二階は続き間の客座敷になっている。

本建物の造営年代を物語る史料や棟札は発見されていない。大工は菊地陽棟梁（明治15年－昭和16年）が明治後期に住宅棟を建てた後、大正時代に建てたと伝えられる。昭和戦前の切縮め改造工事は菊地健が携わった。

前述のようにこの改修工事によって、平面を隅切のかたちに切縮め、かつ蔀戸と屋外の庇で構成されていた外観を、下屋庇側に戸を入れて室内に取り込む改造を施した。大正10年に撮影された古写真では一文字葺き屋根がみえるため、昭和16年の改造で現状の鱗葺きに改められたことがわかる。昭和戦前の改造以降は大きな改修はない。

3 修復再生について

3.1 学生によるデザイン提案

海老喜旧店舗については、中村研究室による建築史調査で、平面図等の実測図は制作していた。しかしながら、ディスプレイ・修復に際しては、立面図や矩計図等の実測図を補足する必要があった。そこで、本プロジェクトに参加する3研究室合同で、2018年5月から継続的に実測調査を行い、計画に必要なベースとなる図面類を整えた。



図2 旧店舗・表蔵立面図（作図：小野寺伸・後藤淳）



写真2 実測（スケッチ）の様子



写真3 実測（測量）

同時に、プロジェクト参加学生がディスプレイ提案を教員によるエスキスを重ねながら作成していった。2018年8月8日に、海老喜の敷地内にある登録有形文化財「海老喜ホール」（旧醤油仕込み蔵）を会場に、学生デザイン提案の発表会を行った。所有者や地域住民のほか、登米市の文化財文化振興室や住宅都市整備課の担当者も集まり、学生提案に対する活発な意見交換の場となった。当日の様子はTBC東北放送「Nスタみやぎ」で放送されるなど、メディアの関心も高いプロジェクトとなった。



写真4 8月8日開催のデザイン提案会の様子



写真5 学生によるディスプレイ提案

3.2 修復について

本プロジェクトは、登米市の街なみ景観整備の助成事業に採択されたことから、ディスプレイに伴う建物の修復整備を行うことができた。具体的には、新建材の天井や壁、床といった既存改修部位の撤去、土間や外壁の左官工事、建具の調整、外観の木部・建具の塗装などである。これらの修復設計については、実測図面に基づき中村研究室が行った。

また施工についても、できるかぎり学生参加型の進行を行った。すなわち大工、左官、塗装の専門職人と連携しながら、部分的に学生が施工に参加することで、修復プロセスを学ぶ実践的教育の場ともなった。修復のプロセスは次のような工程をたどった。

まず、雑然と置かれた既存の物品の移動・撤去および清掃作業である。初回は10月28日に実施した。これらの作業はすべて学生が行った。また本プロジェクトは、歴史的建造物が集積する登米町のほかの建物の保存活用を促進するパイロット事業となることも意識した。そのため、現場に修復作業の工程や内容を紹介する展示パネルを吊り下げて、地域住民に本プロジェクトの進行を確認いただけるよう配慮した。

12月10日に3研究室合同で、修復設計および展示デザインの確認を行った。ディスプレイの展示品については、海老喜が所蔵する資料を集約して陳列する方針として、その展示品リストの作成も行った。

2019年1月中は大工、左官、塗装屋との工事打ち合わせを重ねて、最終設計案をまとめた。2019年2月9日より、各種解体工事が行われた。その結果、新建材で覆われていた見事な根太天井が復元され、本来の古い店舗の雰囲気よみがえった。これらの根太や天井板、各種の木部を学生たちが拭き掃除した。

この後、2月27日より、建具や柱・指鴨居といった外部の塗装作業に取りかかった。この工程は本修復の特徴のひとつで、伝統的な柿渋塗装を学生が施工することを試みた。柿渋は渋柿から製造する塗料であるが、色味の調整の難しさや重ね塗りの必要性から、近年は使用される機会が少ない。しかしながら、今回の対象建物は文化財建造物であり、伝統的な材料による修復にこだわり、昔ながらの柿渋塗装に取り組むことになった。今回は塗布と乾燥による色味をみながら、二回の重ね塗りと荏油によるオイルフィニッシュとした。学生たちによる柿渋塗装の様子は、近隣の方々の関心も高かった。学生も作業について、住民から質問を受けることが多かった。このように、学生参加型でオープンな修復作業を実践することで、地域の方々にも歴史的建造物の修復に関心を寄せる機会となった。



写真6 物品片付け



写真7 清掃作業



写真8 プロジェクトパネルの設置



写真9 根太天井の拭き掃除



写真10 柿渋の調合



写真11 柿渋塗装

3.3 ディスプレーについて

ディスプレイに関する什器設計は、大沼研究室と中村研究室が協力してデザインと仕様をまとめていった。最終的には、本ディスプレイの什器をダンボールで制作することになった。これは整備されたディスプレイ空間を、フレキシブルに多様な活用ができる意図からである。

すなわち、展示品を陳列する展示台や展示台の脚を、組立型のダンボール什器することで、組み合わせをかえて、展示台が椅子・テーブルに変換できるような寸法と仕様を設計とした。これにより、ディスプレイとして整備された空間を、場合によって、ワークショップ空間へ転換できる仕組みとした。

また隅部のウィンドー・ディスプレイの見どころとなる棚のデザインも工夫した。三角柱を設置し、その柱に棚板が積み重ねる独特なデザインを実現した。この三角柱は交互に内側と外側へ向ける配置として、展示品が内と外の双方へ向かう表現とした。

3月に、これら制作された什器の搬入・組立を現地で行い、展示品を演示した。

展示品は、登米町の魅力を通る方々へ伝えるような構成とした。すなわち、中央部分は味噌醤油の商家らしく帳場や桶・樽・徳利などで店舗の雰囲気再現した。一方、隅部の三角柱のディスプレイについては、登米町の時代的移り変わりを表現する展示とした。すなわち、「江戸」「明治」「大正・昭和」そして「平成」と、海老喜が所蔵するゆかりの品々を時代区分ごとにわけて、全体として移り変わる町の姿を感じ取る陳列とした。これは「みやぎの明治村」というキャッチフレーズが定着している一方、実際の登米町には江戸時代の寺社や武家屋敷、あるいは昭和の近代建築、平成の現代建築が織りなす姿にこそ、価値を認めたいというコンセプトを展示で表現したものである。

こうしてすべての演示を終えて、3月23日に現地で行った完成のお披露目会を実施した。海老喜ホールを会場としたお披露目のプレゼンテーションでは、学生による本プロジェクトの解説だけでなく、今後のワークショップ等の活用提案についても発表した。またお披露目会において、所有者から新しく整備された空間を、そのロケーションや賑わいへの期待をこめて「海老喜まちかど館」と名付けることが発表された。



写真12 ダンボール展示什器の組立



写真13 椅子・机に転用できる展示什器



写真14 竣工したディスプレイ



写真15 修復再生された海老喜まちかど館

4 プロジェクトの成果と課題

以上、本プロジェクトの進行と特徴について報告した。最後に、この海老喜旧店舗の修復再生について、その成果および課題を次のようにまとめたい。

第一に学生のデザイン提案にとどまらず、修復作業も学生参加型で実施した点が大きな成果といえる。片づけや清掃、展示品の陳列といった作業だけでなく、今回は伝統的な柿渋塗装にも学生が携わった。伝統技法を学ぶ教育的効果はもちろんのこと、これによって地域の方々に対する広報的な効果もみられた。刷毛で柿渋を塗る学生たちの姿を町の方々も足をとめて観察し、修復作業に関心が高まったと思われる。ここで柿渋塗装のノウハウを培ったことから、2019年には青森県弘前市の武家町で、町並みを構成する黒板塀の渋墨の塗装を学生が行うという波及効果ももたらされた。

第二に、改修型の再生計画ではなく、文化財の修復に集約したプロジェクトであったことである。修復作業は木工や左官工事を施したものの必要最低限の工程であり、作業はあくまで新建材の撤去により本来の姿を復元することにこだわった。登米町は歴史的価値の高い建物が数多く伝わり、その保存対策のモデルのひとつが提示できたと考える。すなわち、大掛かりな改修作業を施さない、必要最低限の復元的な処理で、本来の空間をよみがえらせる手法を示せた。

またダンボールによる什器制作で、ディスプレイをワークショップ空間へ転換する工夫を施した点もひとつの成果である。逆にこのような什器設計により、今後の活用がより重要性を帯びることになった。町のランドマークとなるような位置を占める場であり、この建物の活用が、商店街の活性化等のきっかけとなるような潜在力をもつからである。2019年度も、本プロジェクトを継続するかたちで、登米町の歴史的建造物をネットワーク的に活用し、地域づくりへの貢献を目指すプロジェクトに取り組んでいる。そのなかで、本プロジェクトで整備した海老喜まちかど館が、魅力ある地域づくりへと貢献できるような活用策を引き続き考えていきたい。

謝辞

本プロジェクトの場を提供いただいた海老喜・海老名康和様をはじめ、登米市教育委員会文化財文化振興室、登米市建設部住宅都市整備課、とよま振興公社の皆様のご支援をいただきました。また施工および学生指導に携わっていただいた菊地幸様（菊地工務店）、千葉洋一様（伊藤塗装店）、及川晃一様（及川左官）、今野英樹様（今野梱包）、阿部正様にも感謝します。

参考文献

- 1 阿部竜生「登米旧城下町の商家建築」
東北工業大学建築学科中村研究室 2017 年度卒業論文
- 2 小林愛菜「語らいを生むディスプレイデザイン」
東北工業大学安全安心生活デザイン学科大沼研究室 2018 年度卒業制作